ＨＢＶ母子感染予防処置児の長期追跡成績

多 田 裕[1,2]、佐 藤 紀 子[2]

要約： ＨＢｅ抗原陽性の母親から出生した児３２０例に母子感染予防処置を行なった。長期追跡結果では、キャリアとなったのは１２例で、子宮内感染例２例を含めてもキャリア化率は３．８％であった。しかし、ＨＢｃ抗体は、出生直後にＨＢＩＧの筋注と静注用を併用した群では３．４％、筋注のみの群では２７．５％に１才以降にも陽性であった。２才時にＨＢｃ抗体が陰性であっても３才以降になってＨＢｃ抗体が出現する例もおよそ２０％に認められた。

見出し語： 母子感染予防、長期追跡成績、ＨＢｓ抗原キャリア、ＨＢｃ抗体持続陽性

（１）東京都立築地産院におけるＨＢｅ抗原陽性母体からの出生し予防処置を受けた児の追跡成績

昭和５５年１月から昭和６４年１２月までの８年間に東京都立築地産院で出生した児のうち、ＨＢｅ抗原陽性の母親から出生した児は３８２例であり、このうち臍帯血のＨＢｓ抗原が陽性で子宮内感染と考えられる２例を除く３８０例に、ＨＢＩＧおよびＨＢワクチンを用いた母子感染予防処置を実施した。

結果は６ヶ月以上追跡し得た３６７例のうち、ＨＢｓ抗原が陽性になった児は、持続陽性（キャリア）の１２例（途中で処置を中止した脱落例を含む）と一過性陽性の３例のみで、３５５例（９６．２％）はＨＢｓ抗原が陰性であった。子宮内感染例をふくめたキャリア化率は３.８％であった。

（２）予防処置成功率の変化

我々は能動免疫によると思われるＨＢｓ抗体価の上昇が確認されるまで、ＨＢＩＧおよびＨＢワクチンの投与を繰り返し、能動免疫獲得後も３才までは、抗体価を８ＰＨＡ価以上に保つ様ワクチンの追加接種を実施している。

[1] 東邦大学医学部新生児学研究室（Dept. of Neonatology, Toho Univ. School of Medicine）
[2] 東京都立築地産院小児科（Div. of Pediatrics, Tsukiji Maternity Hospital）

この方法による母子感染予防成績を、１９８０年から８４年４月まで（前期）と、１９８５年５月から１９８９年１２月まで（後期）の２群に分けて検討した。

前期にはアジュバンドを含まないＨＢワクチンが投与され、アジュバンドを含むワクチンが投与されてからもワクチンの接種開始を生後１カ月以内としていた。後期には現在一般に行われているように生後２カ月からワクチンの接種を開始している。後期の中でも初期には血漿由来のワクチンを用いていたが、最近では遺伝子組み替えワクチンが接種されている。

結果は表１に示した通りで、前期に比し後期にはキャリアとなる例が６％から１．６％に減少し、一過性の感染症も少なく、抗体産生力に優れたワクチンの投与が望ましく、またワクチン接種の時期は１カ月以降の成績がよく、現在一般に実施されている予防方法は有効な方法であることが示された。

（３）ＨＢｃ抗体の検討

母子感染予防処置によりＨＢｓ抗体の上昇を認めた児の中には、ワクチンによる抗体上昇例と、ＨＢｓ抗原は検出されていないが一過性の感染を経過した、感染後の抗体上昇例がある。後者では生後１年以降で、母体から移行したＨＢｃ抗体価が消失した後にもＨＢｃ抗体が引続き陽性であると考えられるので、長期追跡例のＨＢｃ抗体価の変動を検討した。

結果は、出生直後に静注用のＨＢＩＧを投与しさらに２４時間後に筋注用のＨＢＩＧを投与した群では、感染率はＨＢｓ抗原陽性３．８％、ＨＢｃ抗体陽性３．４％で９３．７％は感染を免れた。一方、筋注のみの群ではＨＢｓ抗原陽性は認められなかったが、ＨＢｃ抗体持続陽性が２７．５％に認められ、早期に十分量のＨＢＩＧを投与することが重要であると考えられた。

２才時点でＨＢｃ抗体が陰性であった児のうち、その後ＨＢｃ抗体の上昇を認めた例は、

表　ＨＢＶ母子感染予防処置後のＨＢｓ抗原陽性例

	１９８０.１－１９８４.５	１９８４.５－１９８９.１２
出生数	１８５	１９７
６ｍ未満の追跡数	２	１１
６ｍ以上の追跡数	１８３	１８６
ＨＢｓＡｇ陽性キャリア	１１（６.０％）	３（１.６％）
臍帯血陽性	２	０
初期陽性	３	１
後期陽性	６	２
ＨＢｓＡｇ一過性陽性	３	０
初期陽性	１	０
後期陽性	２	０
ＨＢｓＡｇ陰性	１６９（９２.３％）	１８３（９８.４）

ＨＢＩＧ静注併用群の１３．９％、筋注のみの群の２３．８％に認められ、感染予防の為には長期にＨＢｓ抗体価を維持することが必要であることが示唆された（表２、３）。

表２　ＨＢｃ抗体持続陽性例

院内出生児	ＩＶ＋ＩＭ	ＩＭ
ＨＢｃ抗体陰性化例	２２３（９３．７％）	２９（７２．５％）
ＨＢｃ抗体陽性持続例	８（　３．４％）	１１（２７．５％）
ＨＢｓ後期陽性例	９（　３．８％）	０（　０．０％）
合計	２３８	４０

表３　長期追跡中のＨＢｃ抗体の再上昇例

院内出生児	ＩＶ＋ＩＭ	ＩＭ
ＨＢｃ抗体陰性持続例	１７４（８６．１％）	１６（７６．２％）
ＨＢｃ抗体再上昇例	２８（１３．９％）	５（２３．８％）
合計	２０２	２１

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:HBe 抗原陽性の母親から出生した児 320 例に母子感染予防処置を行なった。長期追跡結果では、キャリアとなったのは 12 例で、子宮内感染例 2 例を含めてもキャリア化率は 3.8%であった。しかし、HBc 抗体は、出生直後にHBIGの筋注と静注用を併用した群では3.4%、筋注のみの群では 27.5%に 1 才以降にも陽性であった。2 才時に HBc 抗体が陰性であっても 3 才以降になって HBc 抗体が出現する例もおよそ 20%に認められた。